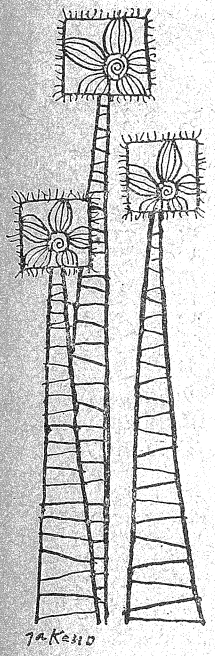
文部時報

第794号

昭和 33 年 10 月



(座談会)
科学技術教育をめぐつて……2

城戸　幡太郎
出席者　佐々木　重雄
菅井　準一
司会　大島　文義

科学技術教育の現状　山中　光一…15

理科教育に従事する教員の研修について
関　利一郎…22

アメリカの高校物理教育見たまゝ　金原寿郎…28

ソヴエトの理科教育　白井　俊明…42

米ソの科学技術教育の比較　斉藤　国夫…48

文化交流について思う　寺中　作雄…73

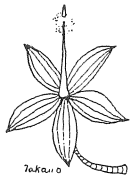
審議会の動き……61

新しい理科教室　川崎　正敬…81

文部省通達一覧……96

表紙……原　秀造　カット……滋野秀夫・高野譲

文化交流について思う



―在仏大使館勤務の体験から―

寺中作雄

一

「支那人にまちがえられて参りましたよ」とよく外国旅行からの帰朝者が頭をかきながらみやげ話に話したものである。外国人を差別扱いしないフランスなどでは、特に日本人と支那人の区別はなく、東洋人と見ればみんな支那人だろうぐらいに考えていたのが従来の観念であった。ところが最近のフランスでは、それが変ってきた。支那人とはっきり区別をつけて、「あなたは日本人でしょう。」と図星をさしてくる。支那によって代表されていた東洋の内でも、更にその極東というべき地域に、日本という不思議な文明国があったことを今更のように思い出し、戦後の西欧人の意識の中に、支那とは区別された文化国日本の姿がひようぜんと浮かび上がってきたのだ。

もちろん今度の大戦に大きな役割を勤めた日本のことであるから、全然その存在を忘れていたわけではない。ただ実力もないくせに戦争だけが好きで小なまいきなスタンドプレーを演ずる未開の軍国国家日本というぐらいの観念で見ていたものであろう。だが現実には戦後数年の経緯を経て世界の地図は大きく塗り変えられた。インドもパキスタンもインドネシヤも、その他の東南アジヤ諸国も戦後いち早く宿願の独立旗をかゝげる機会を与えられたがこれらの諸国が独立の端緒を与えられたのはたしかに日本という国の犠牲的壮挙の間接的恩恵に負うところだといえないことはない。こういうことで異国人の往来の多いフランスで、日本はまずこれら戦後独立国人の注目尊敬の的となり、ひいてはフランス人の関心注目を引くこととなったのだ。

ねこ背でちんちくりんで、眼鏡をかけ、よれよれの服をまとい、カメラだけは申し合わせたように高価な最新式のものを肩からぶらさげて、疲れ切った姿でシャンゼリゼ街を歩いている日本の旅行者――この貧相なかつこうをした民族が世界戦争における東洋の立役者となり、この一族の中からノー

ベル学者湯川秀樹を出し、かれらの仲間が作った映画「羅生門」が映画祭に大賞をかち得たとは、ちょっと思い設けない事実としか受け取れないかもしれない。最高度の近代的科学文明と東洋的神秘に満ちた伝統文化とが背中合せに抱き合わされた不思議な東洋の文化国日本の姿は、たしかに外国人にとって一つの驚異でありせんさく研究の対象とするに足る文化的課題なのであろう。

二

フランスにかぎらず、いま欧州全体にいわゆる日本ブームという風が吹き回っている。およそ日本のものは何でも関心の的であり、興味の対象である。

毎年秋、コレクションと呼ばれる最新服飾デザインの発表会には、衣冠束帯をもじったり、まいこのだらりの帯にヒントを得たようなスタイルが「そくたい」「さむらい」などの名まえで紹介される。日本の書道はアブストレ美術の中に取り入れられてフランス画壇に書道派なる一つのエコールを創立することになった。

フランス人自ら企画して日本の文化を紹介するための試みを次に発表して注目をひいた。毎年グランパレーで催される家庭用品大展示会（サロン・ド・メナージュ）の一角に日本家屋が建築され、畳、ふすま、障子、置きこたつ、茶ぶ台などをあしらった日本間が展示されて大ぜいの観覧者を迎えた。新聞は一週間の連続読物として日本旅行のルポータージュを連載し、造船事業を代表とする日本産業の現状から、芸者、太陽族、深夜喫茶の生態までをこくめいに紹介した。日本映画の試写会やスライドを使った日本事情講演会が一つの流行のように各地で催され、年末の慈善市に並べられた日本人形や日本の食器、ぜん、盆の類がたちまち人気を独占して売り盡された。日本から派遣された昨年の能楽公演、今年の花柳舞踊団が満員の観客を迎えたことはいうまでもなく、また日本古美術展は近代美術館の入場者数の記録を破り、日本人形展、児玉希望展、上阪雅人展、日本書道展、在仏日本人画家美術展がそれ〴〵意外と思われるほどの観覧者をひきつけたのである。

毎年春にはパリにあるいくつかの旅行社が競争で日本旅行団の会員募集を試みる。大使館へは日本旅行あっせんの照会問合せが殺到する。その他、大使館にあてて、毎日のように飛び込んで来る面接と書簡による各種の照会は多方面にわたって、回答に応じ切れないほどである。たとえば、「日本の著名な数学者関孝和の経歴、業績等を知りたい。」「日本の文学者夏目漱石の生年歿年を知りたい。」「関門トンネル建設の質料がほしい。」「日本の古い版画をもっているがその作者について鑑定してもらいたい。」「日本の民謡「かっぽれ」のレコードを持っているが、歌詞がわからないから、歌詞を仏訳してほしい。」「世界菊花コンクールを開催するから、ぜひとも日本の菊を出品してほしい。」等々々。

三

こうした日本ブームがわき起ることになった原因を考えてみると二つある。

一つは中国革命の影響だ、由来フランスの東洋文化への関心は歴史的に浅からぬものを持っているが、その場合東洋といえば支那であって、フランスにおける支那学の研究、支那の芸術、支那の美術工芸との接触は古くからずいぶん盛んなものであった。その支那が共産革命を成功させたことはフランス人に強い衝撃を与えたことはもちろんであるが、これによって貿易は中絶され、文化交流の道をふさがれるとともに、フランス人の判断によれば、新しい中共勢力は伝統の支那文化を破壊し、今日の中国にはなんら東洋文化の学ぶべきものを残していない。東洋の文化が、純粋な形で残されているのは、現在ではただ日本のみである。真の東洋の文化を研究しようと思えば、日本について研究するほかにない。日本こそ現在ただ一つ残された東洋文化の保有者であり鼓吹者であるという認識がもたらされたことである。

第二はアジア、アフリカ連盟における日本の国際的地位の認識である。中東地域を中心にする民族主義の新しい台頭は欧州諸国にとっては実は迷惑であり、頭痛の種である。せん鋭化するアラブ諸民族の民族自立活動を何とかして懐柔し制御するために、欧米諸国は日夜頭を痛めているが、そのAA連盟の一翼をにない、むしろその指導者的立場にある日本は、同時にまた欧米陣営に属して欧米近代国家群のために犬馬の労を取る立場にもある。そこで欧米国家群としては、日本こそ近代国家的自覚と国際的条理感覚をもって、AA連盟諸国を近代的水準まで高めるための指導的役割を果し、欧州とアジアとをつなぐ仲介あっせん役となり、東西文化融合のかけ橋となるべき国であるとの期待をかけているのである。

このことは最近のイラク革命、レバノン、ヨルダン派兵を中心に繰り広げられたいわゆる中東問題に関して、国際連合が日本の態度に寄せた大きな期待と信頼の上にもはっきりと現れているではないか。今度の安保理事会で、日本の提出した決議案がソ連を除く、すべての理事国群から信頼され満場の期待をもって、採決の一歩手前まで取り上げられたということはまったくこれまでにないことであり、今後も国際問題が起るごとに、国際連合における日本の役割はます〴〵重きを加えてくることであろう。日本文化に対する高い評価と日本民族に対する相当な敬意とはそうしたところに導かれているものと見るべきである。

四

この数年の間で、パリでいちばん大当りを取った日本映画は「羅生門」でも「地獄門」でもなく、松竹映画「お母さん」である。「羅生門」と「地獄門」が日本映画欧州進出の突破口を作ったことはたしかであるが、その後に出て、数か月の続映を続け、今でも「思い出の名画」の一つに数えられ、深くフランス人の胸底の琴線に触れて忘れられない印象を残しているのは、この何の変哲もない日本人の現代の家庭生活の一こまを描いた平凡な作品「お母さん」なのである。日本好きのフランス人などの集りで日本映画の話が出ると、申し合わせたように、「あの「おかざん」は良かったね。」と数年前の古い記憶を呼び起しながら夢みるように感嘆するのである。日本ではほとんど忘れ去られているぐらいのこの平凡な作品がどうしてこれほどフランス人に持てているのか不思議なくらいである。

要するにこのストーリーのもつおもしろさや、ねらいとしている家庭生活のペイソスに共感を感じたというよりは、日本の家庭生活の構造、家の制度を中心にした親子、兄弟、夫婦生活のあり方に無限の興味を覚え、それらの関係をつなぐ慎しみがちな愛情の糸にフランス人の間にはないある好もしさを感じて、長く忘れ難い魅力を残したものと思われる。フランス人はもはや画面の物珍らしさでひきつけた大時代な大名や姫君の義理人情ばなしには飽き飽きしてしまった。そういうものではなくて、むしろ映画を通じて、現代の平凡な市井の日本人の生活に触れ、日本人のありのままの生態を研究し、日本人の実際の性格を探ってみたい、身近に日本を感じて、日本人の好み、日本人の文化の秘密に触れてみたいという研究的態度がある。そういう意味で「お母さん」は、かれらの望む研究材料を提供するものであり、別の意味でかれらの好奇心に投ずるものであった。

「羅生門」「地獄門」以来、同巧の「修善寺物語」や「新平家物語」などが相継いで欧州市場へ売りに出たが、フランスの配給業者はいっさい受け付けず、全部お蔵になって税関の倉庫内で眠っている。そして「お母さん」だけが、いまだに「思出の名作」として消し難い印象となっている事実を日本の映画業者は考えるべきである。

五

せめて映画を通じても、日本人の生態を知り、日本人を研究したいという熱望を持っているフランス人が、一生の宿願にも日本に旅行し、直接、伝統の東洋文化に接し、身近に日本人の生活の実態に触れてみたいと思う人々が数多くいることは当然である。先年、大統領の主宰する学生論文コンクールに入選して賞金を得たフランスの一高校生が、わずか二万フランばかりの賞金を資金にして日本へ旅行したいという相談で私のところへやってきたことがあった「二万フランで日本へ行くのは無理でしょう」と忠告したが、「貨物船の水夫をやって働きながら旅行します。まずアメリカへ渡って、そこでアルバイトして少し資金をかせぎ、それから日本へ渡って日本漁業の研究をしたいと思います。」という壮志をぶちまけるので、その勇ましさに負けて、朝日新聞を通じて紹介の労を取ったところ、その十七才の少年はついに素志を貫徹して、まもなく日本に現われ、各地で活躍しているという記事を、その後朝日新聞で見た。十七才の少年のおう盛な冒険心自立性に感嘆したが、少年の好奇心をゆすぶる日本という国の不思議な魅力もまた抜き難いものであったに違いない。

こうした少年にかぎらず、いろ〳〵な口実と用件を見つけて日本旅行を計画し、その相談に来館するフランス人はあとを断たないにぎやかさである。

「日本旅行のスケデュールを作ってほしい。」「日本の旅館の宿泊賃はいかほど?」「ホテルでなく、日本人の普通の家庭に泊ってみたいが、それは可能か」というような質問や相談で当惑させられるのである。それらの人々がまた常に異口同音に問うことは

「パリには日本の旅行案内所はないのですか。」という質問である。実はそれがないのである。これほど人気のある日本旅行のためにどうして案内所を作らないのかと不思議でならないらしい。というのは世界の各国はいずれも目抜きの通りにその国の旅行案内所を開設して、希望者に地図、観光案内ホテル一覧表、交通案内所などの大小のパンフレットを山のように無料で提供してくれる。旅行のスケデュールから回遊券の調達まで親切にサービスして観光客を迎えることにどこの国での相当な精力と資金とを注ぎ込んでいる。そういう実情を見ていながら、せめて各国並のつき合いのできるサービス機関がないのは日本として気恥かしいばかりでなく、みす〳〵少なくない日本観光希望客を逸しているのである。大使館の文化アタッシエができる観光誘致のサービスには限界がある。時には失望を与えて帰してしまうこれら特志の訪問者に対して真実済まないと思う。というのは大使館には客に満足を与えるような資料もなく、貧弱な一枚刷りのリーフレットを渡すぐらいが関の山で、せっかく意気込んでたずねて来たフランス人も「日本は観光客を観迎しないのだろうか」という疑問さえいだいて帰ってゆくように思われるからである。ましてこの人々が日本へ行った場合、自動車もろく〳〵走らせられない悪い道路を見、全然徹底していない町の交通標示や地名町名の表示の混乱に接した場合、まったく日本は観光客を観迎しない国だという感想を深くするのではなかろ

うかと思う。

せめてパリに観光案内所がほしいと思うのは心ある者の最低の要望であるが、実は日本文化会館が当然の欲求として待望されているのである。パリの中心部に、観光案内、商品展示、日本料理店、休憩室、講堂、映写室、客間日本茶室、図書室、更に欲をいえば宿泊施設、商社出張所等を包含した会館を持って、常に日本文化の宣伝と紹介を間断なく実施できるように設備することは、今は当然に考えられて良い構想である。これは何もぜいたくな夢ではない。というのは世界各国が大なり小なりいずれも、そうした構想の会館を国際都市パリの市内に実在させていて、それらの施設を中心に国際文化戦を演じているからである。あの北欧の小国デンマークがシャンゼリゼ街のまん中に完全な設備をもった会館を建て商品展示に文化宣伝にきわ立った活動を続けていることは既に有名であり、金にあかしたアメリカの会館活動もいうまでもなくはでなものである。本拠を会館にすえて、映画の試写でも、美術の展示でも、商品の紹介でも常時にできるようになれば、フランス人も神秘の国日本を単なる好奇心（キュリオシティ）だけで見ることもなく、真実の日本の姿をもっと如実に紹介することもできるであろうし、外国人の好むすき焼、天ぷらの生粋の日本の味を通じても日仏親善を自然の姿で盛り上げてゆくこともできるであろう。

この夢の実現は結局政府の放出する予算にかかっていることであるが、最近外務省も本腰を入れて日本文化会館建設調査の段階を踏み出しているから、国民的協力の肩を借りれば、案外早く実現の日を見ることとなるかもしれない。

六

しかし会館ができるということでは問題は半分しか解決しないのである。会館の建設は人間でいえば胴体を作るだけの仕事であって、人間が働きを起すためには血が通わなければならないことはもちろんである。文化交流の血を通わせるために、私はどうしても活動能力をもった国際文化進興会が必要であると思う。現在ある国際文化振興会には数多い名士が関係しておられるようであるが、活動資金不足のために一向目ぼしい活躍ができない現状にあることは衆目が認めている。

参考のために、フランスの国際文化振興会について語れば、その協会はAssociation d' action astistigue francais（フランス芸術活動協会）と呼ばれ、名は協会であるが、実際は政府直営機関であって、政府そのものの活動と全く変りはない。というのはこの機関の会長は文部省芸術局長であり、理事長は外務省文化局次長で、事務局長を外務省文化局芸術課長がやっている。協会の経理は全部国費でまかなわれ、年

間三億五千万フランの予算を縦横に使って活発に活動している。国際文化交流の仕事は日本でもその所属に問題があって、「それは文部省の仕事だ」「いやそれは外務省だ」という議論が絶えず、なわ張り根性が自由な活動を阻止している点が、少なくないが、フランスでも、仕事そのものは政府が先頭に立ってやるべきことであるが権限の関係から、文部省と外務省とをつきまぜた協会組織を作り、しかも政府事業でやるよりも、もっと自由に融通のきく活動を行うために法人のような形を借りてやっているのである。

協会の活動は、美術、音楽、演劇、学術等広い分野にまたがる文化の相互交流に及び、有益と思われる企画には、存分に金を出して即事即応に有効に予算が使われている。日本古美術展のフランスにおける主催団体になったのもこの協会であり、田中耕太郎博士や、矢内原忠雄学長、矢代幸雄教授をフランスに迎えて国賓的待遇をしたのもこの団体であった。年間三億五千万フランの予算の支出は事務長格の外務省文化局芸術課長ゴバン氏の宰配で簡単にできるらしく、処理のすばやいこと、支出額の気前のよいことも、日本人の眼から見ればうらやましいほどである。理事には何人かの名士の名も並んでいるようであるが、仕事の責任は外務省の能吏に一任されているから、すべて任せ切りの処理が許されているらしい。適当な芸術的な企画に補助金を出し、芸術家、学者の相互交換が有意義とあれば、理事長である外務省文化局次長の決意で即刻に実現するのである。

およそ文化の国際交流などという仕事は当然国家が責任をもってやる仕事であって、国民外交を口実に、補助金もない私設機関の国際文化振興会に任せ切りにしていて、有効な活動ができるわけはない。冬眠している国際文化振興会に相当な補助金を出すか、でなければこの組織を政府機関の一翼にだき込んで、文化交流のための国費をじゆうぶんに予算化するかして、この方面にいっそうの考慮を払うかしなければ、せっかく各国に盛り上がりつゝある日本ブームの熱も、あえなくしぼんでしまい、日本は文化外交戦に敗惨の身を機たえることになってしまうであろう。

ついでにフランスがフランス芸術活動協会の組織以外で文化交流に国費を注いで努力している事業をあげれば、テアドル・ド・ナシオン（国際劇場）と呼ばれる組織に、国費とパリ市費とで一億フランの補助金を支出し、サラ・ベルナールという一私立劇場に計画させて世界各国の最高演劇を招待し、春季約三か月にわたって、外国劇団の競演をやらせている。昨年の日本の能楽公演も今年の花柳舞踊団の公演もこのわくの中で行われた。それから毎年のカンヌ映画祭のためには四千万フランの国費で映画劇場を立て、毎年世界各国のフイルムを競映させて、映画事業の振興とフランス観光の奨励

の一石二鳥を実現している。また、例の国立劇場オペラ座、オペラ・コミック座のためには年間二億フランの予算を使い、演劇事業とはいえ、実はフランスオペラの国際的声価を高める政策を実施しているのである。

七

最後にフランスの日本ブームについて反省するとき、私はまだ〳〵この日本熱がほんとうに地についていないことを指摘したい。日本は単なるフランス人の好奇心の対象であり、フジヤマ・ゲイシャをもてあそぶ傾向や、誤った日本認識の上に道化を踊っているような印象がないでもないということである。フランスの学校教科書には日本に関する記載はわずか数行の文字で現われ、しかも旧時の佩刀黒紋付ばりの日本人が描かれていたり、ひどいのは支那服を着た日本人のさし絵さえそう入されているのを見る。

上っ面な日本熱でなく、ほんとうの日本認識を植えつけるためには、真の日本研究家が、日本文字でつづられた日本の書物を読み、日本語を通じて日本を研究するところから地についた日本認識を持つように、その機会と環境を与えなければならない。真の日本学研究家が二人でも三人でもふえてゆくことが、その影響が広く波及して真の日本との友交を植えつけるゆえんであり、真の文化交流の根をつちかうゆえんである。しかも日本語を勉強し、根抵から日本文化を研究したい希望者は何人もいるのだ。にもかゝわらず、よく編集された日本語教科書もなく、外国人のための日本語の辞書もない。ソルボンヌ大学附属の東洋語学校には日本語を学習する生徒が百人近くも養成されているが、かれらはそういった研究の手段がないために、途惑いし、勉学の困難をかこっているのである。こうした特志の学者学生に対する研究援助の面から、日本側で施策することはいくらでもあるし、大した金を使わずに有効な仕事ができるはずである。日本活字の字母を送ってフランスで優秀な日本語辞典ぐらい編纂できるようになれば、フランス人の日本語に対する関心はいつそう高まることであろうし、それによって、地についた日本研究家を生み出す素地ができてゆくであろう。日仏文化交流の仕事で、進めるべきことは無数にある。もっと日本人全体が深く考えて良い事がらであると思う。

（国立競技場　理事長）

（前号から続く）

文会管	418	国有財産の数量の端数整理について	5.15	〃	本省会計参事官・国立学校長・所轄機関長・文化財委員長
〃	515	昭和33年度国有資産所在市町村交付金について	5.21	〃	〃
国会	125	国家公務員のための国設宿舎に関する法律の施行に関する政令第6条第2項の規定に基く指定の改正について	5.9	文部大臣	〃
〃	133	昭和33年度予算執行に関する手続等について	5.14	会計参事官	本省会計参事官・国立学校長・所轄機関長・文化財委員長・都道府県知事
〃	127	国有財産の管理及び処分の適正化について	5.20	〃	本省会計参事官・国立学校長・所轄機関長・文化財委員長・関係都道府県知事
〃	156	債権現在額通知書の記載要領について	5.30	〃	債権管理官
〃	157	支出官事務規程第21条の規定による外国送金の外国貨幣換算率について	6.10	〃	本省会計参事官・国立学校長・所轄機関長・文化財委員長
学会	245	国立大学の附属演習林の売払代金の延納について	5.26	文部大臣	国立学校長

初等中等教育局

（財　務　課）

文初財	29	昭和32年度義務教育費国庫負担金決算見込額の調査について	5.15	初等中等教育局長	都道府県教育委員会

編集後記

○秋深み日々紅葉の深まるのを感ずる季節となりました。今月は、科学技術教育に関係して集めてみましたが、これは一時のかけ声だけに終ることなく、一歩〳〵充実してゆくべき問題と思います。

○九月号の中に掲載しました指導要領に関する記事のうちで、総則・特別教育活動等に関するものが欠けておりますが、これは十一月号に掲載を予定しております。合わせてごらんください。

○来年の文部時報に使用する表紙図案を募ります。毎年多数お送りいただいていますが、今年もふるって御応募くださるようお願い申しあげます。応募の規定は十四ページにあります。

○今年は大きな教育上の問題が提起され、戦後十三年日本の教育は一つの大きな曲りかどに立っており、深く考えさせられるこのごろであります。

MEJ8817

文部時報十月号

第九百七十四号

昭和三十三年十月五日　印刷
昭和三十三年十月十日　発行

著作権所有　文　部　省

発行者　東京都中央区銀座西七の一　株式会社帝国地方行政学会

印刷者　東京都立川市曙町三の五五　株式会社行政学会印刷所

発行所　東京都中央区銀座西七の一　株式会社帝国地方行政学会

電話(57)二二二六～九
振替口座　東京五七一

購読料

定価　一冊六十五円
送料　〃　四　円
一か年　七百八拾円
（送料不要）

ただし増大号・臨時号の場合は別に代金を申しうけます。なお、購読の申込みは、直接発行所、またはもよりの書店にお願いします。